
ハナノナノ（未定） 1

希羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハナノナノ（未定） 1

【Nコード】

N4010U

【作者名】

希羽

【あらすじ】

どっかのライトノベル公募企画投稿予定作品。一生に一度は投稿しようと思っただけ。投稿後も改稿は幾度となく繰り返す予定なのでアドバイスございましたら大歓迎です。

(前書き)

※※※読みづらいかと思いますが、可能ならば縦書きで読んで評価していただけるとよいかも知れません（主に作者にとって）。

K i c k t h e k i d d i n g g e a r s

(イントロ 保留にしました)

J . B . & a m p ; A d m i r a b l e b u d

麗らかな春と裏腹に、ふと肌に触れるひと筆を風と知ってなお、不機嫌に宙を搔く人、既に高校生なり。

恩着せがましい太陽光と新春を淡く色づける春の風物詩。それらに対して険悪な表情で人混みを闊歩する新入生がいた。

入学式を見送って二回目の月曜日のこと。

僕はえげつないほど進行方向を染める桜並木に沿って、当てもなく中庭を彷徨っていたのだ。

「桃色なのは頭の中だけで十分だろ」

冗談を一つ。

万歩計の節電でも試みているのか、大股でずかずかと芽吹きの間引きに励む。

新緑は油絵のように点々と息吹き、あらゆるみどりが光を求めて首をもたげる。

短い昼休みでは到底回り尽くすことのできない広大な敷地と、単一色の青空を不細工な三角に切り取る直方体の校舎。

ここは棟の数だけで両手両足の指を総動員しなくてはならない規模の、巨大な教育施設だ。

反り立つ壁面に耐えがたい圧迫感を覚える僕は、新鮮な友好関係を築くまでの間、自身を置いておくのに疲弊を要さない場所を探し

歩く。

一つの街といって語弊の少ないこの小世界に自主的にぶち込まれて、最初に確保すべきは心の水と食料。

精神のサバイバル中。

冒険心も多少手伝ってひとり放浪、というわけ。

入学する以前から見知ってはいたものの、遊園地かゴルフ場かで激しい論争した揚句に教育現場でお茶を濁したのではと未だに疑いを隠せない。

農地として献上すれば、この国の食糧事情に明るい未来を啓示してくれそうな、そんな広大な敷地を持つ我が校。

飽き足らず同系列の大学、研究所が増築されたのは数年前のこと、スポーツや芸術に関する多くの設備が並々ならない手筈で整っている。

開校は10年以上も前だが、それ以降、様々な企業との提携や導入が繰り返された。

そして、ついたあだ名は”テーマの定まらなかったテーマパーク”。

絶えず囁かれるところから、その皮肉もあらかた的を射ていることが伺える。

しかし、全国に点在する、校門と下駄箱が仲良しの理想的な高等学校に比べ（本校の校門と下駄箱はバス停一つ分の距離を設ける）、とりわけ学力水準が高いわけでも、優秀な部活動が多くあるわけでもない。

SF映画に登場する天才集団もなければ戦闘技術を学ぶ学科なども存在しない。

そこはひたすらに人数ばかりが集まり、ときたま何かに秀でた人間がいるというごくごく当たり前な日常の庭。

その模様がたかだか平均値の5、6倍ほどの人数で展開されているというだけの話。

言うだけなら、こんなにも簡単だ。

「校舎地下まで最寄り駅から十五分！」という修学目的より通学手段を重視したキャッチコピーで、安直に入学を取り決める知り合いも多く、僕自身もまたその該当者に限りなく近かった。

進学に関して言えば、目立った名門校のないこの地域一帯で、中学生の進路を根こそぎ掻き集めているのが現状だったりする。

そんな一部偏向した学校紹介を思案しながら目をやると、映し出されるのはそれまでの学生生活の延長としての、一般的な生徒の戯れや喧騒。

足を止めた。

澄んだ笑い声や、探り探りの日常会話がどこかしこで木霊する。土のキャンバスで重なり合う薄墨のドット上に、光の泡がいくつも――木漏れ日が目に優しい。

僕は半袖推奨の熱気から逃れるべく、ほどよい日陰スポットを探してまた歩く。

それからしばらく、歩き疲れて腹時計で20分。体感時間ではその二倍を観測した。

頭上でほどよく渦巻く惰性と目的意識。

「花の香り：」

見えないどこかから、花が香った。

どこことなくそのまま歩を進めると、昼時を楽しむ生徒の群れから距離をおいたところで、ちょうど強制日光浴から回避できそうな憩いの場を発見する。

校舎と校舎の隙間にできた、限られた時間しか日の射さないであろう空き地。それは遠目には察知しにくく、壁に沿って忍者ごっこでもしていないとなかなか見つからないような奥地。

僕の足どりは意図せずそこに呼びこまれた。

幸いなことに紫外線はログアウト中だ。

今なら全裸で逆立ちしても、法律の目は届かない。

「あと十歳若ければなあ」と非公開で後悔する。

そっと足元を見ると小さな花壇がお上品に敷かれ、親しみのある

春の花々が精いっぱいその両手を広げていた。ご自慢の色どりを披露して、得意げに僕の感想を待ちわびているようだ。

パステルカラーというのか、自己主張の強い色彩美が芸術的で、鑑賞するだけで夜更かし疲れの目に休暇をもたらす。

社交辞令として愛でてあげたくなるも、親しみやすいと前置きしておきながら、名称を全く思い出せないところに自身の浅はかさを垣間見たので、しゃがんで嗜むにとどめた。

同じ春季の花々の中に、その色素から日本古来と外来の間にほんのり民族性を感じ取ったりして、学者気どりで感慨にふけっていると、ふと、不可解さが浮かび上がる。

近所のホームセンターでお馴染みの赤茶色い煉瓦に囲まれる花壇の一角。その一部だけ、花びらがあるべき場所に無く、茎の断面がこちらを覗いているのだ。

それらは首を切り落とされ、なお意識を留めた様に、無残さと喪失を嘆き、訴えかけてくる。

気持ちばかりの自然界で、不自然がこちらを向いているように。ぎよつとした。

日陰の涼しさも許可なく手伝って、皮膚が泡立つ。

断面とそこから垂れる水分は、人為的に、それもわりと几帳面にハサミか何かで切り取られたことを安易に感じさせた。

しかも、秒刻みでそう遠くない過去に。

数にして五本くらいか。

そして、気がかりなのが、色を持つ花びらがどこにも散っていないこと。

膝について視線を下げると、肥料と土の匂いがした。

柔らかなような花畑の上では、平和も戦争も知らない昆虫たちが、年中無休の通常業務にその身を委ねている。

ものの奇妙さの次に抱いたのは、なぜこんなことをするのかという純粹な疑問だった。

そもそもこんな入りこんだ場所に花壇があるのだから、当初より

回収を目的として企画された可能性も否めない。

誰かの悪ふざけなら、その丁寧さを倫理面に振り分けて生活して
いって欲しい。

光景はあまり好ましくないのは不服だが、存外、押し花クラブと
かあってその手の趣味の材料調達スポットなのかもしれないな。

だとしたらかなりフライングして閲覧しちゃったのかなボクちゃ
ん。

「てへっ」とか大多数の人の心情を害する掛け声は呑みこんで、
腰を上げた。

よくわからないけど、人間関係に疲れたら、また来こようか。ど
こか異国の様な雰囲気も気にいったし。

その前に、某歌にならって、友達百人の実現に尽力しなくては。
小目標の攻略と午後からの授業も考慮し、本日の探険は終了とす
る。

その頃には既に、ここに来るまでの経緯をド忘れていたものの、
行き当たりばったりは願ったり。

「まあいいや」と小声に出して、来た道に目をやった。

その時だ。

油断を全力で体现したまま、振り返る視野の端で影をとらえた。
唐突な気配に身体が硬直する。

「ふえ」

語尾に感嘆符がつかない上限ラインくらいの声量で、広辞苑もび
っくりの未確認単語が出迎えてくれた。

願ってもないところでばったり。

僕は無言で目をしかめる。

位置関係から、後光が差すように見えるその人物を捉えるのには
少々時間を要した。

目が慣れるまでの優雅な4秒間。

風も息をひそめる陰と陽の境目に、校舎から漏れ出したのか、軽
やかなクラシックが細々と響いていたのに気がつく。

呆然と立ち尽くした二人は、目を合わせ、揺るがない。

壁が四方を取り囲んだ景観は、まるで垂直に掘られた大きな井戸の中にいるような錯覚を生み、高い高い空は数字の概念を破棄して、心底遠く蒼く感じられた。

矛盾を承知で、空に落ちる恐怖を抱くほど、それはそれは深い。意識が雲の上に登り、怠惰な重力に従いながら、眠くなるような速さで僕の脳に落下している。

北風も太陽も猿も犬も、命を奪いあった兵士も、皆が散歩途中に笑顔で会釈して通り過ぎそうな安堵の午後。

誰かの音楽が、知らない譜面を流れる。

取り囲む壁は、その旋律で反響の波をつくりだし、二人を澄んだ音の泉に沈めた。

神秘的な世界が抱かせる、感覚の滑空。

ボタンッ！！！！

そしてそんな僕の意識は、頭上の強烈な窓の閉鎖音に急速落下を已む無くさせられるのだった。

次いで爽やかなクラシックも、容赦なく打ち止められた。

台無しである。

頭上の部屋で何があったのかと気にかけて見上げると、追い打ちをかけるように施錠音までしたので、僕はそこで考えるのをやめた。

一瞬、世界が終わるのかと思うほどの不意打ち。

テレビ鑑賞中の停電や、秘密の書物拝読中に両親が部屋に入ってきたとき並みに取り乱しかける。

だが、その不快感の黙殺も容易いほどに、僕は感情の重心を奪われることになった。

数歩先にいたその人は、例え状況が違ってても脳が健康な男子なら二度見必須の出で立ち。

まるで、彼女の足元から草花が広がる様で、背負う斜光は両翼か、向かう瞳は二滴の雫か。

さながら、額のない聖女の絵画。

心を、いつまでもここに、置いていたくなる。

くせの強い温色の髪はくねる先端を肩で終え、ひよっこりとその間から耳が光る。

眩む残像のシルエットが、角の生えない子羊を思わせた。

無垢に首をかしげる。

僕の記憶はその誰かを、誰かと重ね、瞬きも忘れて表情を緩める。
まばたき
すぐ、固めた。

僅かに前傾になり、また無言で目をしかめる。

肌が白すぎる点を除けば、不審なのは花びらを口に咥くわえていることぐらいだった。

三度見すると、両手に花を物理的に実行している。

それらが、花壇のものと酷似しているのを一度確かめ、見事に四度見を達成。

その度ごとにどうしてか、心臓が高鳴った。

最先端で斬新なファッションかと、現代を生きる若者としては考察を怠れない。

詳細を訊き出すために僕が口を開こうとすると、彼女はぺろりと口元の花びらを舌で回収し、「私の顔に何かついてます？」とスピーディに愚行を試みたので「お嬢さん、ほっぺにパンジーついてますよ」とこっそりフォローしてみた。うろ覚えの知識を添えて。

反応はこうだ。

首を固定したまま、右手で不格好に頬を撫でまわした後、その手に持った朱色の花卉に気づくなり、両手を後ろに回しては視線を逸らす。

それから小声でひとこと。

「押し花クラブの方ですか？」

実在したのかよ押し花クラブ。

内心で予知能力の必要性に意識を傾けつつ、ちゃっかりもぐもぐしている前方の女性への、質問項目を準備していた。

ものを含んだまま口を開くのは、女性として恥ずべきと自覚して

いるようで、小刻みな咀嚼^{そしゃく}に精を出す女子生徒。

モラルを維持するなら大穴を見逃していると思うけど。

細い喉を、植物性の何かが通った。

少々べたついた唇が、雄蕊^{おしべ}の名残を噴き出すためか開かれる。

僕はそれを会話再開の合図と受け取ることにした。

まずは、その行動が主旨なのかヤケクソなのかを知りたいな。
逸^{はや}る気持ちを抑えて、相手方の質問にお答えする。

「いいえ、通りすがりの美食家です。お花の美味しいお店があるときいて」

まあ、と真に受けた顔を見せる。

「そうでしたか。店員さんなら先ほどそちらの角を走って行かれましたよ。追いかけて尋ねてみてはどうでしょう？」

取り繕ったような敬語が、動揺に起因したもののなか、普段通りなのかはさておき、事も無げに上品な姿勢で、帰り道を示してくれた。

「白々しいですね」

「何のことを言ってるのかしら？」

「いえ、お手持ちの花々が、白いですねという話です」

首を傾いで、生徒はちらりと後方の手の内を確認した。

そして、失態の自覚に澄まし顔が硬直し、往生際悪く今度は営業スマイルを輝かせる。

僕が営業部部长なら満点をあげるだろう。

そして僕は気付いてゆく。

「白い花には心当たりがないですね」

「すいません、僕の記憶違いでした。誠に申し訳ない。その花壇の花と同じ色でした」

茎々（くきぐき）となった花々を指さしても、今度はこちらから目を離さない。

どうやら現行犯で確信犯のようだ。

それも、善意と悪意が会議中のまま実行に移った模様。

あらゆる想像産物の中にも前例を見たことがないので、利己的な試食会の目的は見当もつかない。

まあ、だからと言ってどうもしないけど。

そんなことよりも、僕にとって最も興味があるのは、これがおそらく”再会”だということだ。

可能性の肥大化が、心臓の稼働速度に拍車をかける。

もう二度と、会いたくはなかった相手との邂逅^{かいこう}。

既知との遭遇。

「正直者にしか見えないのでしょうか？ 私は嘘つきなので心当たりがないのですが」

「仰ってることが説得力を削減してますが」

「お年ごろなので、不要な部位を減らして体重計のご機嫌をとりたいんです。ところで、なんのお話でしたっけ？ 私が身も心も白いという話題ですか？」

身の潔白を晴らしたいらしい。

揺れる肩が、逃走の準備運動を内緒で報告してくれた。

「あなたが面白いという話です。いや違ったか、美食家が偏食家と出会うお話です」

「はあ、今年も邦画界は盛り上がりそうにないですね。毎年チケット代の回帰を願うので今年こそはと思ったんですが。で、いつ上映なんですかそんな珍妙なモダンコメディ？」

「ええ、一部地域で消極的に生中継されています（日本全国を除く）。視聴者を代表してさっきのやつ、もう一発お願いしますよお」

口調を棒にして媚^こびへつらうと、「仕方ないなあー」と半ば崩れかけた営業スマイルの口内に両手から花卉が葬られる。

そして、証拠隠滅を達成しながら、後方に全力で走り始めた。

和洋折衷な奥の細道。言えば横穴。

爽やかな弱風を置き土産に、狭い建物の狭間へと逃げ込む。

「ま、待って」

僕は、不思議の国を駆け回る某少女が兎を追いかける要領で、不

慣れな地形の中、行く手と足場の間で視点を往復させながら逢いたくもなかった彼女を追いかける。

やり取りの最中、無断で拝見させていただいた目と鼻口耳。拝聴した声、声、声。

疑惑は確信へと近づいていき、行きつくところは未来予想図との一致。

人が通ることを考慮されていない迷宮の様な日陰道。土に形成された細い水路。

在り余った土地への贅沢に無計画な増築が、おそらくこの人工溪谷を育んだのだ。はぐく

季節に背を向けたその湿度は、天然の茸類を栽培するのに雑作もない気がして、ますますこの学校の農業従事を推進したくなる。

全米の子女の夢を瓦解させる容姿のアリスが、頭脳の不可思議回路を彷徨いながら脱兎の追跡に汗を流す。

追いかける理由はなんだろう。

目的を、手段の段階で考えてみた。

思い描いてみて欲しい。

その人と逢うことを拒否していた二年間。

発端は彼女の口が吐いた言葉。それは僕にとって、残酷以外の何でもない意志表示。

それらが理解できずに、認められずに彼女を避け続けた。

ならばここで足を止めて、無言のさようならをしてみればいい。

それで終わり。同じ学校とは言え、この広すぎる箱庭なら、もう二度と顔を合わせないことだってあり得る。

今日のことなんて、学校の七不思議をひとつ体験したくらいに思っただけのことなんて、学校のカンタン。

ほんの小さな心の傷など、誰しも乗り越えていつしかそれを笑い話に酒を舐める。

だったら今更、突拍子もなく放り投げられた巡り合いなんか放置して、苦みも甘みもまだない新生活を謳歌おうかすべきと思うだろう。今

までの様に。

だが、僕は未知の嗜好なんて今は気にならないくらい、心の根底でこの巡り合わせに混迷していたのだった。

それは、逃げ続けてきた僕を、真逆に追いかけさせる理由があったからだ。

そう、理由がある。

そこで提案を妨害し、両足に鉛を追加する疑問点が一つ。

「あなたは、僕が誰だか気づいているのだろうか？」

僕の見てくれは、自慢ではないが、この二年で著しい変化はしていない。（友人談）

常軌を逸した単独お食事会の件が邪魔ぐだりをして、彼女の表情からうかがい知ることもできずにいた。若干、ただの他人ごっこではないかと高を括くっていた。それが自らの願望に近いものとも気づかず。

もしも僕だとわかつているなら望みは薄い。状況は異質でも、あの人が僕を”拒絶”していることになる。彼女の心は過去のまま、僕を一方的に見限って憤慨し、切り離れた、あのときのままだ。

今もなお、僕を”拒絶”していることがわかれば、それでいい。それなら、僕の行動の理由、質問はきつと取り合われない。小さな想いは宙に消えるだろう。

でも、欲望に忠実な頭は考えてしまう。

もしも、円つぶらな瞳が二個中二個とも節穴だしたら、再会を自覚したとき、彼女はどんな顔をするだろう。どんなことを語るだろう。そう、捨てきれなかった思い出が後押しする。

やはり、あの時と同じように”拒絶”をするんだろうか？

そうでないとしたら？

たったひとつの、理由——”確認したいこと”が胸の中で暴れ出した。

僕は彼女に聞きたいことがある。聞かなければ気が済まないことがある。

必死にならなければならぬことがある。

だから今、この足は土を飛ばして動くのだ。

逢いたくなかったくせに、心の奥底でソレが再熱した。

この世でたったの一人しか知らない想いが、風のあとにささやかな火を灯そうとする。

そいつは決して轟々と無作為に酸素を食い散らす勢いは持たないが、不完全燃焼では決して煮え切れない、やたらと執着心の強い奴だった。煙たがられないようにと、自己啓発は欠かさなかったそいつが、申し訳なさそうに僕に囁いてきた。

「せっかくだし、訊けるときにきいたらどうでしょう…か？」

我ながらなんと情けないことか。これだから世の中で草食系男子が増えて少子化が進むんだよな。いやだけでも、それが花の女子高生の勘違いには繋がらないはず、といらぬ釘打ち。

どうやら、デリケートな僕の思考はそろそろ破綻しなさったようなので、今度は久々に感情のお出ましか。

二年前の出来事。

僕は、初恋の相手が世界一好きな人を定めた後のたった一言で、納得を先送りにして心情の宛先を未来の自分に託した。

無念さも喪失感も抱き合わせで。

ただ一つ疑問を残し、その相手との思い出は海馬の異物になり果てた。

さて、未来の僕などどこにいるというのか？

右にも左にもその姿は見えない。

それなら仕方がない。

「仕方ねえよな」

あの日に彼女が僕を”拒絶”した理由、本当の気持ち、それを知るための絶妙なチャンスを決して逃さない。

目的が手段に噓けた。

不本意に動作する全身が自主性を取り戻した。

答えなど決まっていた葛藤に終止符を打ち、つまらない巡り合わせを有効活用して過去の自分を漂白したい。

心の底辺にいくつも転がる七恵結ななえゆんとの思い出を呼び起こした。

それから、それらを束ねて繋いだ鎖を揺らすと、過去のたった数刻の会話風景が、脳を驚掴みして握り潰そうとする。

あのときの彼女のあの目が、今も脳裏に雑多に掲載されて離れないでいる。その際言われた一言一言に、自身の本意と、現実と理想の関係性を頭蓋骨へと撃ち込まれ、僕は彼女の前を去った。彼女の本心だけがわからなかった。

七恵結のことは、それ以来知らない。

さようならも響かない。さようなら。

「はいはい」

懐古を寸断して、目標を気持ちの再確認へと移行完了。

不服だったことにいまさら憤りを覚え、自家栽培の悔しさをばねに足を速めた。

それにしても、縦に長い空間はこれでもかというくらい続く。

両端にそびえる建築物は、背中あわせに反り立ち内側の方には一切窓がない。

地盤の亀裂に滑り落ちたようだ。出入口が封鎖されたなら、脱出の為の疑似ロッククライミングが楽しめそうだな。日帰りできればいいけど。

前方を未だ全力で走る女学生は、スカートが短いことに気を配る余裕がないらしく、後方の僕に対して視線誘導のトラップを撒き散らす。肝心な部分が断固引きこもりを宣言しているので、腰を落とす走行姿勢も実を結ばない。

軽い冗談を心で呟いては、そうやって緊張をほぐした。

湿った側面には、御丁寧に追跡を阻害するつる草が繁殖を営んでいる。

長身の方が比較的不利を被りこうむ、距離は少しずつ離されていった。

この道の先には何があるのだろうか？

悪戦苦闘も終盤のようで、薄暗い谷底の奥に鬼ごっこの終わりが差し込んだ。

先ほどの草の茂り具合から言って、おおよそ彼女もここを通るのは初めてのはず。

追いつけないことを悟り3秒遅れで光の中に身を投げた。

辺りは小さな広場だった。

校舎の裏道の出口を背にし、向かって右には更に別の棟の壁面、左にはホームランボールにさえ歯止めをかけそうな高いフェンス。そして奥は、木々が鬱蒼と生い茂る山の麓となっていた。

5メートル四方ほどの明るい空間に、二人は辿り着いた。

コンビニの駐車場ほどの空き地に、生徒が二人。

彼女もさすがに、今から山登りに専念する気にはなれないらしく、肩を落として息を荒らげ、のっそりと踵きびすを返した。

「きゃーだれかーたすけてーへんたいよー」

疲労を隠ぺいしながら冗談じみた棒読みを披露してくれた。

「悪あがきなら、発声練習が足りなかったみたいですね」

飽くまで強がる姿勢の花泥棒さん。

僕も肩で息を続けた。

これ以上、冗談のお相手は休業させてもらおう。

三歩ほど、距離を詰めた。

静かな広場では、男女の息遣いが音の全てを掌握しやうあくしている。

顎まで滴る汗を手の甲で拭ぬぐい、思い出の想起を無断で繰り返す頭部の内臓を黙らせた。

なんといったものか。

「えーっと」

切り出すと、怯えた小動物の眼球が、半分恨めしそうにこちらを見つめ始めた。

「見逃して…」

言葉の反復を求めて「ん？」と漏らす。

中腰から背筋を伸ばして向き直る、推定七恵結。

「花を無断で食べたこと、見逃して欲しいの」

片目をつぶり合掌を左の頬に添えながら言う。表情に余裕がない。
「そんなことは雑作もないですね」

目的を得て、千載一遇の機会に神経を研ぎ澄ます僕にとっては、
おちやめな食癖などものはや二の次だった。

それに、無断であろうとなかろうと、そもそもそこに大きな違い
は生まれないだろう。

「そこまでしてお花を食べたいんですか？」の返しを保留に設定し、
もう一步踏み出す。

「七恵結さんですね」

第一の質問が無自覚に確認へと昇格していた。

それで間違いないという意中。

そうであって欲しいという懇願。

確証はないという注意を忘れず添えた。

三原色の混色は白か黒か。

啞然とした相手方。

白磁のようだった頬は血色を増し薄紅色。

少し隙間を空けた唇は、食した花卉に類似して濃い朱。

細い喉をまた何かが通った。今度はきつと花ではない何か。

そして吐き出されるのは答えか。

「…あなたは…誰」

驚愕は、配慮の域を凌駕して、呆れと化す。

僕の全身に力が加わり、筋肉は僕を拘束する。

二択の返事は滞納されて、質問を返却された。

それは間接的に二つ目に用意した質問の答えにもなる。

同時に、期待と不安は崩れ落ちて霧散した。

確信が一つ。

本当に僕という存在に見覚えがないようで、失望を抱かずにはい
られない。

悪い冗談だと、思いたいな。

不覚にも零しそうになったので、誰かもわからない何かに背を向けて歯を食いしばった。

食いしばり過ぎて奥歯が痛み、虫歯が発覚しそうなので心を落ちつけることにした。

「そっか、”イラナイ” んでしたね」

自嘲して、自分の馬鹿らしさを再認識した。

僕は焦り過ぎて力んだ全身を脱力させ、慄然となる。

ジョークでもとばそうか。

自慢の執着心を生かして、進路をストーカーとかに移行しようかと検討したい。ある意味でとび級を果たすわけで、退職と同時に三食一部屋つきの償いつぐなデイズまで保障されているから老後も安泰だ。よくできました。

舌打ちを3回。

あさいしゅん
「朝夷純」

要らない過去の人間は、捨て台詞を吐いて退陣することにした。

自分の名前なんてポイ捨てしても誰も拾わないのにな。置きっぱなしでも、もちろん肥やしにすらならない。不法投棄もいいところ。

「えっ」

後頭部の方で何か聴こえても振り向かないこととした。

もし訊き逃されていても、それはそれで構わない。

さーて、今後どんな学園生活をエンジョイするかな。

手始めに押花クラブに入部してみるのも悪くないな。

畑を食い荒らす妖精さんの対策を強いられるのが気に障るけど。

膝の骨がみしみしと機動音を奏でる。

「あのさ！」

呼びとめる声は、一秒の半分だけ効力を発揮した。

春の花（生食用）を道端で味わう人より自分の頭はどうかしてた。もう用はない。

終わった人間関係に興味はない。

興味を持たれない相手は、他人に位置付けるのみだ。

そう言えばタンポポとかは食べれるよな。じゃあ尚更気にかけるほどのことでもなかったか。

足首もめきめきとセッションに参加し始める。

運動不足が祟ったな。

放課後はやっぱり運動部を見て回ろう。

「私の知り合い…ですよね？」

そう思うなら言葉を選ぶべきでしょうね。僕以外には実用されないことを願うばかりだ。

「私、その…」

次の言葉は出ない。

人間は余計なことは忘れられる生き物ですものね。

大切な人のことは、嫌というほど思いだすのに。

思い出すやつが一つ覚えの馬鹿なら同情するけど。

「ごめんなさい。大切な人…ですか」

呼吸が止まる。

心拍音がこめかみのあたりで聴こえる。

大切な人。

それは誰の誰に対して抱く感想を指しているんだろうか。

僕の彼女に対するものなら現在、回答拒否の一点張り。

あなたの僕に対するものなら、不機嫌な顔と、幼い声で否定済みですよ。

今更ながら、その会話の流れが声の主と七恵結を一致させたけれど、それは時間差で他人を傷つける結果を生んだのだった。

そう、他人を。

”確認したいこと”は結局、訊くまでもなく、無駄足に全力を注ぐだけとなった。

強がりが弾けそうになるのを抑え込んだ。

「さようなら」

さようならは響かない。

口の中で聴こえないように呟いた。

弱過ぎて春の風にさらわれた。

それから、風は赤の他人の息切れまで呑みこみ、生気のない沈黙を置き去りにした。

温風と入れ替わりに鈍い音が鼓膜を揺らす。

妙な予感が首を締めあげた。

立ち止まる。

前言を撤回して振り返る。

目前で、七恵結が無様な日向ぼっこを開始していた。

自分の唱えた五文字が、空っぽの意識の中で反芻はんすうされる。無意味な罪悪感を伴って。

顔を砂利ヘダイビングさせて、額から亀裂がこんにちはしている。

悪ふざけではないのだった。

流れ出す赤を残して脳内は白紙に戻る。

「――」

捨てたはずの呼称が、僕の口から零れた。

死んだ魔法の言葉。

悪い夢でも、ないのだった。

花喰いの兎を追いかけて辿り着いたそこは、優しさも逃げ場もない小規模な不思議の国。

顔を歪めたアリス少年は、一度だけ何かを抱きしめて、眠り落ちた兎を現実の世界につれて帰ることにした。

花の香りがした。

食べたからじゃない、

「知ってる」

あの頃と同じだもの。

その目は虚ろで、何かが始まってしまうことを、穏やかに拒絶していた。

(後書き)

ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4010u/>

ハナノナノ（未定） 1

2011年7月30日03時24分発行